

ライスボードのポジティブ米ニケーション

(株)ライスボード新潟総務部長・米ニケーター 豊永 有

米を通して人・自然・夢が交わり幸せを追求する。
数字や金額では表せない喜びを求めて、「Let's米ニケーション！」

“米ニケーション”の原点をお話いたします

今回は、米ニケーションの原形となった学生時代から続けている農村プロデュースの話

―村びと出発―

村びとたちは国際人になりたいと思った。けれど村びとたちは英語がしゃべれなかった。昔むかしほんのちよつと昔まで村びとは鎌を使っていた。父さん母さんが飢えていた時のお話。けれど村びとみんな忘れてしまった。

時は流れて平成元年。村びとたちは考えた。俺たちこれでいいのかな？

東京発信情報じゃ第二の開国だ！黒船だと騒いでいる。訳のわからんエライ人達が、理屈をこねまくる。

村びとがいつも振り回される。もううんざり、ごめんこうむりたい。

村びとは東京のモノサシで計ったら「国際

人”にはとてもなれそうにない。だけど村びとは、アジアの村びとに共通して流れる”血”を直感できる。それは”土”を通して生活の営みであり、生きとし生けるものを包容する自然の中の生活の知恵であつたり…。

さてさて、パキスタン航空763便で旅する村びとたちは、国際人になれるでしょうか。

「アジア村びと知恵較べ 企画書前文より」

●今川きくさんの決心

「豊かな暮らし、子供に良い教育を受けさせるために一生懸命働いてきたのに…」
きくさんは一瞬柔和な顔を険しくした。

「私自身もソバ打ちをしたのは今回が初めて。子供のころ母親が打っていたのを見ていたのでどうにかできた。私の娘たちはソバ打ちどころか魚を三枚におろす事さえできない田んぼの場所だつて知らない」
そして決心したように、

「倉石に帰ったら村のみんなにアカ族の話をしたい。娘たちに料理を教える」

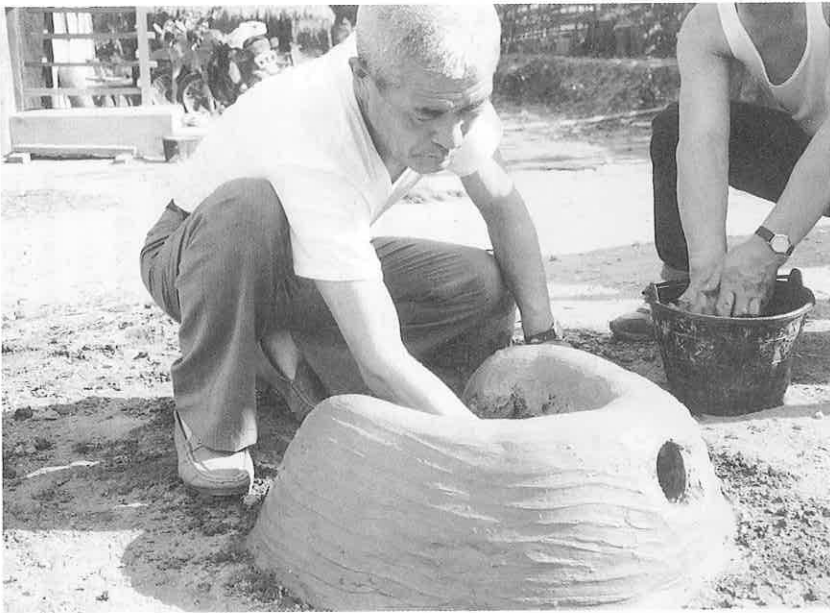
きくさんの言葉にアカ族と倉石の”農村交流”の意味が凝縮されている。経済至上主義で手に入れた物の豊かさの代償として、支払った心の豊かさを見つめ直す旅だつた。

●義幸さんとの出会い

タイ国北部の山岳民族アカ族の村への訪問を決めた晩は、いつもと変わらず山腹の牛小屋で大宴会をしていた。世話役の青年リーダー佐々木義幸さん、今川義雄・きくさん夫婦、義理の兄の今川のじいちゃん、従兄弟の役場の今川さん、そして、若手のホープの小田公征さん。
彼らと知りあつたのはひよんな偶然からだ。



アカ族の若者たち



今川さんのかまどづくりも完成に近い

農大最後の夏にある青年組織のリーダーの研修会に義理で参加して義幸さんと出会ったのだ。お互いにやる気なし、研修に身は入らないが酒は胃袋に入る。すっかり意気投合してしまった。

その年の夏から秋にかけて、岩手県の僻地小学校や4Hクラブを対象に「スライドキャラバン」を計画していた。私はアジア・アフリカ研究会という地球のあちこちで農業実習に明け暮れるサークルに所属していた。その仲間と選りすぐりの写真をスライドにして四名で僻地を巡回する話を義幸さんに話した。

「倉石まで足を伸ばせ」

の一言で早速、キャラバンに青森県倉石村が加えられた。その時にホームステイと実習を受け入れてくれたのが今川さんたちだ。スライドキャラバンを今川さんたちに見てもらい、「二度裸足の村へ連れて行ってくれ」と頼まれていた。

就職してからも出張ついでに倉石に寄っては酒を酌み交わし、そして、遂にアカ族の村に行くことが決まった。

● 渡航費は自己負担で！

今川さんを始めメンバーは各種の海外視察を経験している。渡航費はあえて補助金を頼らず全額自己負担とした。又、アカ族の村に入るに当たり一人一人テーマをもつことにした。「ソバ打ち」「かまど作り」「倉石の生活（小学生の書いた絵）」でアカの人と交流する。

スライドキャラバンでアカ族の生活を多少なりとも知っているのので、「農業指導をしてくる」「効率のいいかまど作りを教える」と意気軒昂だ。単なるアメイションの視察とは気合いの入れ方が違う。

少々うがった見方をすれば、白人の先進国視察では味わえない優越感を抱きながら旅が始まるのであった。

● ルールのわからない旅

倉石のメンバーにとって今回の旅は視察とは違っていた。世話をやいてくれる添乗員もガイドもないのだ。出国手続きからすべて自分でやらなければならぬ。上膳据え膳の旅になれているとどれひとつとっても苦痛だ。入国審査の時には出発の意気ごみはなえきってしまった。それどころか、快適な宿な



村の入り口にある鳥居の上にはきちんと鳥が止まっている

どない。皆んなでコンクリートの床にザコ寝。食事は口に合わないし便所は水瓶で自力排水。大都会のバンコックから北部チェンライの町へ移動。ここは、黄金の三角地帯と呼ばれ麻薬の大産地。ビルマの反政府勢力や山岳少数民族が複雑に入り交じる人種の坩堝だ。

いよいよ、アカ族の村に向かうが乗り物はピックアップトラックの荷台。しかも、乾季で土埃がひどく息もままならない。目指すベンチャーン村の中へは車が行けず途中から歩く羽目に。

村に到着した時にはだれ一人として口を開こうとしない。

「とんでもないところに来てしまった」と後悔してももう遅い。

最も彼らを悩ましたのは言葉の問題だった。



夜には伝統のダンスを見せてくれた

若いメンバーは簡単な日常会話くらいは英語でできるとタカを括っていた。しかし、とても甘かった。ここはタイ語の国。しかも、アカ族の村では残念ながらアカ語しか通じない。倉石村での陽気な彼らはどこか彼方にふっとんでしまった。

● “農民の知恵” で交流

落ち着き始めた頃に村を見学に戻った。高床で茅葺き屋根を目の当たりにした今川さんたちは懐かしそうに見入っている。農具を取って身ぶり手ぶりで使う動作をしてみる。アカ族の人

が農具を使ってみせる。お互いが農家である事が一瞬のうちにわかりあえる。

これには、義幸さんたち若いメンバーが驚いた。言葉がしゃべれなければ国際交流などできる筈ないし、カタコトの英会話で若者がリードし交流すると思っていたからだ。現実には何ひとつしゃべれないお父さんたちが一生懸命交流している。

東京を経由した国際交流では英語が必須アイテムかもしれない。しかし、土を通じた交流に言葉は余り必要がない。土を通じてわかりあえたらもう国際人だ。東京のまね事など全く意味がない。義幸さんたち若い者は東京の毒が全身に回っている。

今川さんたちは村にあった農具や生活用品の使い方が殆どわかった。自信を失っていた目がみるみる内に輝き始めた。

そうになると、がぜん体も軽くなる。倉石方式のかまどを作ったり、アカ族と一緒に焼き畑の準備の急斜面の刈り込みを手伝ったり、ソバ打ちを始めた。自慢の日本酒が「水のようにだ」とアカ族の老人に評された。アカ族の酒はアルコール度が70%だ。酒豪自慢の今川さんたちも形なした。

倉石とアカ族の「アジアの農民の知恵」が交流した。

お金を払って苦勞と重労働をしているのだからおかしい。しかも、楽しくて仕方がないから不思議だ。視察旅行では決して味わうことのできない心の満たされようだ。

たった二泊三日のアカ族との交流だったが、自分たちを見つめ直すには充分だった。経済的な繁栄は豊かさの一部にしか過ぎず、その一部を追いすぎるばかりに大切なものを失っていると気がついたのだ。

● 消えゆくアカ族

この交流は今から七年前のことだ。私も井関農機の新入社員だったのが、今では中年の域に到達している。倉石村のメンバーは相変わらず元気なようだ。

アカ族はこの七年間で生活環境はより深刻なものとなってしまっている。

移動焼き畑のアカ族を無理やりタイ国領内に定住させるのは、彼らの意志とは無関係な極めて政治的な事だ。社会的に不安定なポジションにおかれ彼らの運命は治世者のサジ加減一つで左右される。

この数年では、エイズの蔓延がアカ族を含め山岳少数民族を絶滅の危機に追いつけている。過酷な肉休労働か売春しか働く手段を持たない彼らの運命は明るくない。彼らの約束の地は悠久の時の流れの中にしかないと思うと心が痛い。

経済至上主義から一歩離れ「倉石のきくさん」の思いを広げることが、農村プロデュースであり、アカ族、ひいてはアジアの役に立つ「米ニケーション」だと信じている。



とよなが・ゆう／1964年2月東京都生まれ。東京農業大学卒。井関農機(株)に勤務後、94年4月、東京から新潟県見附市に移住。現在、新潟県の稲作経営者が集まって設立した(株)ライスボード新潟(新潟県長岡市脇川新田町字前島970-1000 ☎0258-66-0070)の総務部長として商品企画・販売を担当。